



やがてくる寒さに 耐えられるか？ 人間ギリギリス

PEC産業教育センター 所長 山田 日登志

20世紀、まさに神様は地球上に人類を繁殖させ、その人類にモノと金に対して欲望を与えた時代でした。

人類は神の存在を忘れ、あたかも自分で生まれ、自分で育ち、自分で考え、自分で人生を楽しむためにモノと金にとりつかれるようになりました。

わずか100年の間に、人類は4倍にも繁殖し、地球上のありとあらゆるところを征服し、地上だけでは物足りなく、地下に秘められた石炭や石油etc、あらゆるものを利用し、人類のために使うことを可能にしました。

それを可能にしたものこそ、イギリスで始まった産業革命でした。

自分のエネルギーでしか動くことができなかった人間が、他のエネルギーを使って動き、モノを加工し、運ぶということをできるようにしたのでした。

初めは、イギリスという北国で寒さを防ぐために着るものを多く作るように始まった革命は、ワットの蒸気機関車の発明により、あらゆるモノ作りや運搬に利用されるようになりました。

神様が、新しい知恵を生むということを人間に与えたのでした。

モノをたくさん作るには、どうすべきかということです。そのためには、同じ方法で同じものを沢山作ることだと知り、機械というものを開発し、人間さえも機械のように使うべきだと知恵を働かせるようになりました。

そして生まれたものこそ、人を分業とって、ただ1つの加工点に付かせて、同じ動作を繰り返し、それを上手く管理することにより、大量生産を可能にした科学的管理法というアメリカで発展したモノづくりのシステムです。

工夫するのは、特殊な人間だけで良しとして、ひたすら1つの動作を繰り返すことが大量生産を可能にするとばかりに、職人の技でしかできなかったモノを作るということを、単純化・

標準化・専門化といって、機械と人に同じ動作を繰り返させることにより、工夫も技も必要なくモノづくりができるようにして、わずかなお金で衣・食・住の生活ができることを実現しました。

余った金は、資本家という人のところに集められ、さらなるモノづくりを工夫できるようにし、人類の欲望を満たすために使われるようになり、自動車や飛行機というものを発明させて地球上どこへも行けるようにし、テレビと携帯電話で、世界中の出来事を、どこにいても見聞きできるようにして、ありとあらゆるものを、金で手に入れることができるようになりました。

次いで人類は、金を簡単に手にいれることを工夫しました。ローンという借金をすることです。

誰かが保証してくれさえすれば、欲しいものが欲しい時に手に入れられる仕組みです。一番信用できる保証者こそ、国家でした。先進国と呼ばれる国ほど、国民が欲しいものを与えることはいいことだと、国債という保証書を次々と発行し、返すあてもないのに、1人1人の人間を満足させ、人類のユートピアを築こうとしました。

もうこれ以上、誰も保証してくれないと分かった国こそ、ギリシャであり、世界中がこの小さな南欧の借金に右往左往しています。ギリシャばかりではありません。世界一豊かさを誇っているアメリカも私たちが住んでいる日本も、ギリシャの何十倍もの借金をして、今日の生活を楽しんでいます。

やがてくる寒さを忘れて、さえずるギリギリスのようです。“金の使えない寒さに”にどう備え、生き延びるのか？その知恵を神様が人類に与えてくれるのか心配が走る今日今次です。